

Title	源氏物語宇治十帖のことばの線
Author(s)	加藤, 昌嘉
Citation	詞林. 1995, 18, p. 41-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67374
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

源氏物語宇治十帖のことはの線

加藤 昌嘉

一 ことはの線

「源氏物語」の中で、（ことは）が鎖列を成している。

（ことは）の連続が、場面・情況・展開を数珠繋ぎにする糸となる。

「源氏物語」を読んでいると、同じ（ことは）が何度も繰り返すという現象に気づかされるのだが、しかしそれは、ただそれのみにとどまる出来事ではなく、偏在する場面・情況・展開を、貫通し横断し繋ぎ合わせるという機能を有しているようなのだ。

例えば「若菜上」巻、「宿世」という（ことは）が、行き所の収まらぬ女三官の降嫁事件を貫いていた、例えば「夕霧」巻「あさまし」という（ことは）が、夕霧と親友柏木の夫人落葉宮との隠微な関係を横断していたり、例えば宇治十帖、「思ひ寄らぬ」という（ことは）が、思いの至らぬ様々な位相の人物たちを繋ぎ合わせていたり……といった如く、点在する（ことは）の連

続が（線）となつて、「源氏物語」中を縦横に駆け巡っている。

しかるに、ここでは、その同語反復という現象が、用意周到な作為によるのか、それとも単なる偶然のなせるわざなのか、などと穿鑿するつもりはいささかもない。ただただ紙の上を仔細に眺めること、そして錯綜する（ことは）たちを辿り辿りすること。そこで、如何なる（線）が、如何なる機能を發揮するのかをこそ見る。

今は、（ことは）の偏りが正篇よりも著しい宇治十帖に目を据えてはいるが、（ことはの線）は、正篇やら統篇やらに頓着なく走り抜けるものであればこそ、とりあえずの任意の作業である。

二 きよらの線 きよげの線

国語学的には、例えば、「きよら」は第一級の高貴な華麗美。「きよげ」は第二級の清浄美、と線引きされたり、例えば、「きよ

ら」は光源氏型・「きよげ」は頭中将型、と分類されたり：…など、と、「源氏物語」を中心とする「きよら」「きよげ」の様相については多くの論稿があり、²⁾、実際「源氏物語」に於いても、桐壺帝・光源氏・紫上には「きよら」が、頭中将・夕霧には「きよげ」が用いられるという違いは見られるものの、玉鬘が登場以来「きよら」と称され続け、軒端萩などが「きよげ」と形容され、夕霧が「藤裏葉」巻で急に「きよら」で「光添ひて」といるといわれ：…というように、発話者・視点人物・情況・役割によってそのつど細かな差異があり、故に、辞書的な一般レベルに解消してしまうことには抵抗を感じるものだけに、むしろ、如何なる状況の下で如何様に「きよら」「きよげ」という(ことば)が(線)を成しているのか、その異なった色糸の交錯をこそ見てゆきたい。

宇治十帖では正篇に比して高い頻度で「きよら」「きよげ」が置かれてあつて、その五人の主要登場人物、薫・匂宮・大君・中君・浮舟に伴う「きよら」「きよげ」は、まさに五者五様の相を呈しており、そのそれぞれを見てみると、³⁾巴の如き宇治十帖を感じる事ができる。

二一A 大君

大君は、専ら「よしあり」「めやすし」と形容されるばかりで、薫・弁君・女房たちからも、あるいは地の文に於いてさえ、「きよら」「きよげ」と称されることが一度としてない人物として作られてある。そもそもその父八宮にしてからが、高貴な生ま

れでありながら「きよげ」としか呼ばれなかったことを思えば当然の造型であろうか。

そして、彼女以降の中君も浮舟も、基本的には「きよら」「きよげ」を持たざるヒロインとして繋がれてあるのだが、この二人についてはいくつか興味深い現象があつて、それらについては、以下、順に見てゆくことにする。

二一B 中君

1(中君は)何心もなく、いときよげにておはす。めづらしくをかした見たまひし人(浮舟)よりも、またこれはなほありがたきさまはしたまへりかし、と見たまふものから、いとよく似たるを思ひ出でたまふも、(浮舟 四〇頁)

匂宮が薫を装つて浮舟の寝所に忍び入り、しかしお互いに惹かれ合いながら日数を経て、それでも仕方なく二条院に帰つた匂宮の視点でとらえられた中君の居姿に、唯一の「きよげ」が置かれる。

宇治十帖に於いて、大君そして中君は一貫して「きよら」「きよげ」を拒まれて存在していたはずなのに、何故、中君はここだけで「きよげ」といわれるのかは、1の直前に位置する、匂宮が浮舟と一夜を過ごして語らう以下の場面と向かい合わせる事によつて、ようやく明らかにし得る。

2女(浮舟)はまた、大将殿(薫)を、いときよげに、またかか人あらむやと見しかど、(匂宮は)こまやかにほひき

よらなることは、こよなくおはしけりと見る。

(浮舟 三五頁)

1も2も、匂宮と浮舟との恋物語の線上に現れる場面なのであるが、1は、匂宮が、今日の前にしている中君を、昨夜契りをつ結んだ浮舟と比べて「きよげ」と思っているところであり、一方それと全く対になる形で、2は、浮舟が、匂宮と薫とを比べて、匂宮を「きよら」「薫を「きよげ」と見ているところである。すなわち、中君は、浮舟との相対的な関係に於いて、ようやく初めて唯一の「きよげ」を獲得したのだ。

このように、宇治十帖の大君・中君は、正篇のヒロインたちと異なり、基本的に「きよら」「きよげ」を与えられぬ存在なのだ。さて、女君をかように定位する男君たち、薫、匂宮は、如何なる「きよら」「きよげ」を有しているのか。

二・C 匂宮

1夜中近くなりて、荒ましき風のきほひに、(匂宮は)いともなまめかしうきよらににはほおはしたるも、(大君も)

いかがおろかにおほえたまはむ。

(総角 六四頁)

2男(匂宮)の御さまの、限りなくなまめかしうきよらにて、この世のみならず、契り頼めきこえたまへば、(中君は)思ひ寄らざりしこととは思ひながら、なかなかの目馴れたりし中納言(薫)のはづかしさよりは、とおほえたまふ。

(総角 六七頁)

3宮(匂宮)わたりたまふ。(浮舟の母君は)ゆかしくてものはさまより見れば、いときよらに、桜を折りたるさましたまひて、

(東屋 二九二頁)

4女(女一宮)の御みなのめでたかりしにも劣らず、(匂宮は)白くきよらにて、なほありしよりは面瘦せたまへる、いと見るかひあり。

(蜻蛉 一五〇頁)

任意の四例を挙げたに過ぎないのだが、1大君からも、2中君からも、3浮舟の母君からも、4薫からも、匂宮は宇治十帖に於いて常に「きよら」なる貴種として見られてある。

宇治十帖の中を、匂宮の「きよら」の(線)が、一筋きれいに走っているといえよう。

二・D 薫

一方、「横笛」巻に於いて、「際離れたるきよら」「皇子たちよりも」「きよら」と称されていた薫は、宇治十帖に於いては、匂宮が常に「きよら」なる最高の気品美を与えられてあるのとは逆に、一貫して「きよげ」といわれ、とうとう最後まで「きよら」なる第一級の美を拒まれた存在としてあり続けている。

1かの御方(大君)の心寄せわきたりし人々の、いと黒く着かえたるをほの見たまふも、

くれなゐに落つる涙もかひなきは形見の色を染めぬ
なりけり

聴し色の氷解けむかと思ゆるを、いとど濡らし添へつ
ながめたまふさま、いとなまめかしうきよげなり。

(総角 一一二頁)

2音をのみ泣きて日数経にければ、顔変りのしたるも、見苦しくはあらで、いよいよものきよげにままめいたるを、女ならばかならず心移りなむと、おの(匂宮)がけしからぬ御心ならひにおほしよるも、

(総角 一一九頁)

「橋姫」「椎本」と語り継いで来た物語は、ここ「総角」巻で初めて、大君の死を歎き悲しみ涙を流すという姿に於いてこそ、薫を「きよげ」と呼ぶ。生まれながらにして「いときよらなる玉の男御子」と称された光源氏との相違に思い至る。

さらに、そうやって大君を追慕し涙に暮れる姿を呈するところで、彼女の形代たる浮舟が招来される。

3(薫が)歩み入りたまふさまを見れば、げに、あなめでた、をかしげとも見えずながらぞ、なまめかしうあてにきよげなるや。

(東屋 三〇〇頁)

4女(浮舟)はまた、大將殿(薫)を、いときよげに、またかか
る人やあらむやと見しかど、(匂宮)はこまやかにほひ
きよらなることは、こよなくおほしけりと見る。

(浮舟 三五頁)

5烏帽子直衣の姿、いとあらまほしくきよげにて、歩み入り
たまふより、はづかしげに用意ことなり。(浮舟 四五頁)

先述した4を含めてこの三例は、浮舟とその母といういわば田舎者が、薫を高貴な存在として、しかし匂宮よりも劣るという相対的な目で、「なまめかしうあてにきよげ」とあらま

ほしくきよげと評しているところである。そしてこの「浮舟」巻以降、「蜻蛉」「手習」「夢浮橋」まで、薫はもう二度と「きよげ」とも「きよら」とも呼ばれることはない。

さて、我々は、ここにも、薫の「きよげ」の(線)が走っているのを見ることが出来る。そして、この(ことばの線)を辿ってゆくと、そこには、大君の死を歎き悲しむ、大君の面影を偲ぶ、形代、人形を欲する……という道筋があつて、それは匂宮との比較対照の下で発せられており、かつ薫がそんな姿を呈することとて浮舟が招来される、そういう連鎖性・法則性が浮かび上がってくるのがわかるだろう。

一・E 浮舟

1(妹尼)「……(浮舟)はいささかおとろえず、いときよげに、ねぢけたるところなくのみのしたまひて、……」

(手習 一八六頁)

2(浮舟の髪は)いたくも乱れず、解き果てたれば、つやつやとけうらなり。

(手習 一九一頁)

3(母尼)「……ここに月ごろものしたまふめる姫君(浮舟)、容貌はいときよらにものしたまふめれど、……」

(手習 二二二頁)

4(僧都)「……げにぞ、容貌はいとうるはしくけうらにて、行ひやつれむもいとほしげになむはべりし。何びとにかはべりけむ」

(手習 二三五頁)

5(僧都)「……かく容貌いとうるはしくきよらなるを見出
でたてまつりて……」
(夢浮橋 二六二頁)

浮舟が「きよげ」「きよら」「けうら」と称されるのはこの五
例。いずれも、浮舟が入水未遂から蘇生して後の「手習」「夢浮
橋」のもの。

登場以来、浮舟は、もつばら「らうたし」「らうたげ」「おほど
か」と形容され、先に見た大君・中君と同様、薫・匂宮いづれか
らも「きよら」「きよげ」と称されることはなかった。八宮の娘
ではあるものの、召人級の母を持ち、常陸介の継娘である以
上、当然といえようか。

ところが、蘇生した後、浮舟は小野の人々、妹尼・母尼・横川
僧都から、突然「きよげ」「きよら」「けうら」「うつくし」「うるは
し」と誉め讃えられ始めるのだ。これは、北川真理氏によつて
「小野という出離の世界の中にあつたから」あるいは「あくま
で彼女の置かれた場がもたらしたものと説明されており、も
ちろんそれで尽きているのだろうが、一方で、薫が「浮舟」巻
以降、「蜻蛉」「手習」「夢浮橋」まで、一度も「きよげ」「きよら」と
呼ばれない事実¹⁾に照らし合わせると、浮舟の入水事件を境に
して、薫が有していた宇治十帖に於ける役割を、この浮舟が受
け継いだかのようにさえ見ええてくる。従つて我々は、その、浮
舟の形容語が大きく変わつてしまふ断絶点であるク浮舟の入
水々なる事件の機能について考えてゆかねばなるまい。

二一F きよげなる男

ク浮舟の入水々とは何だったのか。

横川僧都や妹尼たちに助けられて、そろそろ意識を恢復し
始めた頃に、彼女自身がその失踪前後、入水前後を夢うつつ
のうちに回想するくだりがある。

6心強くこの世に失せなむと思ひ立ちしを、をこがましく
て人に見つけられむよりは、鬼も何も食ひて失ひてよ、と
言ひつつ、つくづくとるたりしを、いときよげなる男の寄
り来て、「いざたまへ、おのがもとへ」と言ひて、抱くこ
ちのせしを、宮と聞こえし人のしたまふとおほえしほど
より、こちまどひにけるなめり、知らぬ所にすゑ置き
て、この男消え失せぬ、と見しを、つひにかく本意のこと
もせずなりぬる、と思ひつついみじう泣く、と思ひしほど
に、そののちのことは絶えて、いかにもいかにもおほえ
す、……
(手習 一八九頁)

ほんやりしていた頃のことを、ほんやりしたままに思い出
しているという態になつてはいるのだが、いったいこの「いとき
よげなる男」とは何なのか。

小学館日本古典文学全集は「さきの法師の靈が、人の形に
なつて現れたか」と疑問を呈しながら註しており、他の多くの
論稿も「物怪」「死靈」「鬼」として解している²⁾。一方で、坂本共展
氏は「観音の靈力の現われ」と説いている³⁾。

あるいは、高橋亨氏は「美しい男はじつは物の怪だったかも
しれないし、あるいは観音の化身だったかもしれない」とする

も、「浮舟のさいごの記憶が性的な幻想とかかわり、匂宮だと思つたということをおさえればよいだろう」というように、後の「宮と聞こえし人」に引き付けて解説している。⁽⁷⁾

しかるに、今こそ我々は、〈ことばの線〉で以て、この箇所を讀まねばなるまい。先に挙げた、薫の「きよげ」の〈線〉をここに接続するのだ。

「D 薫 1 2 3 4 5」は、大君を悼んで涙を流し、その人形を欲し、浮舟を呼び起こし、それが匂宮との対照の下で発せられる、という法則性・連鎖性で以て数珠繋ぎにできていたことを思い起こそう。すなわち、大君の形代・人形である浮舟の前に現れるという意味で、あるいは、「宮と聞こえし人」|| 匂宮と対照されて見られているという意味で、この「きよげなる男」は、浮舟にとつての潜在的薫々であるといえるのだ。故に、この6は、潜在的薫々が、人形浮舟を誘い出し、抱き上げて、ついには彼女を人形として川に流さんとする場面なのである。

この潜在的薫々というのは、浮舟とはほ一体化した視点を持つた語りであることから、また「きよげなる男」に敬語がついていないことから、浮舟の無意識・潜在意識に於いての自覚されざる薫々という意味であると、ひとまずはいえる。しかし、それと同時に、テクストの無意識・潜在意識に於いての薫々という意味を、取り急ぎ付け加えねばなるまい。つまり、浮舟の目に映つた美しい男々を表現するために、「をか

しき男」でも「きよなる男」でもなく、あえて「きよげなる男」という〈ことば〉で定位・確定されているというテクスト上の事実を鑿みだとき我々は、〈ことば〉が薫を間接的に志向している、あるいは、テクストが薫を想起させる作用を内在している、と、そういうべきなのだ。

かくして、浮舟は、この場面に於いて、まさしく襖の人形として流された。

「人形」は「撫でもの」とも書かれていたから、浮舟は、文字通り何物かを薫に撫で付けられ賦与されて流された。林田孝和氏はその何物かを「罪」と見て、浮舟を「贖罪の女君」であるとしてはいるのだが、「罪」という形而上的問題は今ほ措いて、〈ことば〉の上の出来事にのみ目を注ぐと、先にも述べた如く、この入水未遂事件は、薫から浮舟への、ある役割の受け渡し点になつていて、「手習」『夢浮橋』の浮舟は、それまで薫が担つていた情況を引き受ける形で造型されている。では、それまで薫が担つていたもの、そして浮舟が担わされたものは如何なるものであつたのか、「隔て」という〈ことば〉を鍵キにして見てゆくことにする。

三 「隔て」の線・「違ふ」の線・「同じ」の線

『源氏物語』には、「隔たる(四段)」「隔つ(下二段)」「隔て

(名)から「隔たりゆく」「思ひ隔つ」なかの隔て」などに及ぶまで、意味の上でも、空間的・時間的・精神的・物理的……と様々な広がりを持つて、実に三百七十余りもの「隔て」がある。

ところが、その中には、「隔て」が全く現れない巻々(「桐壺」「空蟬」「花宴」……)がある一方、若菜上」の二十例、「総角」の二十六例など、高い頻度で「隔て」が現れる巻々もあつて、決して巻の長さや量に比例して平均的に使用されるのではないそれらの(ことば)たちにこそ我々は、場面・情況・展開を紡ぎ出す(ことばの線)を辿ることが出来る。

そこで、「隔て」の頻度が高い巻々を閲するに、正篇に於いては、例えば、光源氏と葵上との「隔て」であつたり、例えば、光源氏と紫上との「隔てなし」であつたりと、その様相は種々雑多なのだが、一巻の中で、ほとんどたった二人の關係に連続して「隔て」が用いられている例としては、「夕顔」巻に於ける光源氏と夕顔とのそれ、「総角」巻に於ける薫と大君とのそれを挙げる事ができる。前者については山口仲美氏の分析・鑑賞に譲るとして、ここでは「総角」巻に、そして今対象としてゐる薫に、宇治十帖に目を注いでゆこう。

そして、また、その「隔て」といふ(ことばの線)を辿つてゆくと、その糸に絡みつくように現れる「違ふ」の(線)や、その糸と対照を成すように流れる「同じ」の(線)のような、宇治十帖中を經巡る様々な色糸の錯綜を見ることが出来る。

三・A 薫——「同じ」の線

薫と大君との關係に於いて、彼は彼女に何を求めていたのか。

1 あげまきに長き契りをむすびこめおなじ所によりもあはなむ
(総角 一二二頁)

「総角」巻頭、この、ある意味、性的にも露骨な歌に始まつて、
2 (薫)「何とはなくて、ただかやうに月をも花をも同じ心にもてあそび、はかなき世のありさまを聞こえ合はせてなむ過ぐさまほしき」
(総角 一二五頁)

と大君に語りかける。彼女の死後にも、

3 ただいかにしてすこしもあはれと思はれて、うちとけたまへらむけしきをも見むと、行く先のあらまし(こと)のみ思ひ続けしに、人(大君)は同じ心にもあらずもてなし、
(宿木 一六四頁)

4 (薫)「いかにながめたまふらむと思ひやるに、同じ心なる人もなき物語も聞こえむとてなむ。はかなくも積る年月かな」
(宿木 一二六頁)

と回想されるように、薫が常に大君に望んでいたものは、彼女と「同じ心」で「同じく」あることだったのだとわかる。

しかし実際には、この二人の間に発露する(ことば)は、それは裏腹に、「隔て」「違ふ」ものであつた。

三・B 薫と大君と——「隔て」の線・「違ふ」の線

1 (薫)「……かばかりうらなく頼みきこゆる心に連ひて、う

らめしくなむ。ともかくもおぼしわくらむさまなどを、さ
はやかにうけたまはりにしがな」と、いとまめだちて聞こ
えたまへば、(大君)「違へきこえじの心にてこそは、かう
まであやしき世の例なるありさまにて、隔てなくもてな
しはべれ。…」(総角 一三頁)

2(薰)「弁君」…世の常のなよびかなる筋にもあらず
や。ただかやうにも隔てて、こと残いたるさまならず、
さし向ひて、とにかくに定めなき世の物語を、隔てなく聞
こえて、つつみたまふ御心の隈残らずもてなしたまはむ
なむ、兄弟などのさやうにむつまじきほどなるもなく、
いとさうぎうしくなむ。…」(総角 一七頁)

3(薰)かくほどもなきもの隔てばかりを障り所にて、お
ぼつかなく思ひつつ過ぐす心おそさの、あまりをこがま
しくもあるかな、と思ひ続けらるれど、(総角 二〇頁)
4(大君)「隔てなきとは、かかるをや言ふらむ。めづらかな
るわざかな」と、あはめたまへるさまのいよいよをかしけ
れば、(薰)「隔てぬ心をさらにおぼしわかねば、聞こえ知
らせむとぞかし。…」(総角 二二頁)

5(薰)御かたはらなる短き几帳を仏の御方にさし隔て
て、かりそめに添ひ臥したまへり。…(薰)は人よりはけ
に仏を思ひきこえたまへる御心にて、…あはあはし
く、思ひそめしに違ふべけれは、(総角 二三頁)

6(大君)「かういとはしたなからで、もの隔てなど聞こえ

ば、まことに心の隔てはさらにあるまじくなむ」といらへ
たまふ。(総角 二五頁)

7心もて「尋ばかり」の隔てにても対面しつるとや、この君
(中君)もおぼすらむと、(大君)は「いみじくはづかしけれ
ば、(総角 二八頁)」

8(大君)「…今となりては、よろづに残りなく頼みきこえ
て、あやしきまでうちとけにたるを、思ひしに違ふさまな
る御心はへのまじりて、…」(総角 三四頁)

9(薰)「これ(中君)をもよそのものとは思ひ放つまじけれ
ど、なほ本意の違はむ、くちをしくて、…例の、をかしく
なつかしきさまにかたらひて明かしたまひつ。(総角 三九頁)

10(薰)「…障子のかためばかりいと強きも、(我々の仲を)
まことにもの清くおしはかりきこゆる人もはべらじ。
…」とて、障子をも引き破りつべきけしきなれば、…
(薰)「さらば、隔てながらも聞こえさせむ。ひたぶるにな
うち捨てさせたまひそ」とてゆるしたてまつりたまへば、
はひ入りて、(総角 五二頁)

11(薰)「いかにこよなく隔たりてはべめれば、いとわりなう
こそ」など、よろづに怨みつつ、(総角 五三頁)

12(薰)「道のほども、帰るさはいとはるけくおぼされて、心

安くも(宇治には)え行き通はざらむことの、かねていと苦しきを、「夜をや隔てむ」と思ひなやみたまふめり。

(総角 五四頁)

13(薫) 小夜衣着て馴れきとは言はずともかごとばかりはかけずしもあらじ

(大君) 隔てなき心ばかりは通ふとも馴れし袖とはかけじとぞおもふ

(総角 六〇頁)

14 障子の固めもいと強し、しひて破らむをば、つらくいみじからむ、とおほしたれば、…(薫)「ただいとおほつかなく、もの隔てたるなむ、胸あかぬこちするを、ありしやうにて聞こえむ」とせめたまへど、

(総角 七二頁)

15(薫) ありしさま、のたまひし心ばへを思ひ出でつつ、さすがにかけ離れ、ことのほかになどははしたなめたまはざりしを、わが心もてあやしうも隔たりにしかな、と胸いたく思ひ続けられたまふ。

(早蕨 一三三頁)

以上は、薫と大君とを巡る「隔て」なる(ことば)のすべてである。

「総角」巻頭、薫の言い奇りに始まり(12)、添い臥したままの契らずの一夜を経て(317)、中君・匂宮を巻き込んだの四つ巴から、大君の死まで(815)、「隔て」という(ことば)が、類を見ない執拗さで反復され、「隔てなく」あれと迫る薫と、いえいえ「隔てなく」こざいますと抵抗する大君とが、繰り返し

描かれる。

その「隔て」も、物理的なものであったり精神的なものであったりと、意味の上では様々なのだが、この「総角」巻には、精神的な「隔てなし」を欲するが故に物理的な「隔てなし」までも強要する薫の倒錯と、精神的に「隔てなく」であるために物理的な「隔て」こそは置こうとする大君の潔癖との、すれ違いの過程が、「隔て」という(ことば)を一本の糸として綴られている。さらには、先に見た「同じ」という薫の望みを皮肉り裏切るように、「違ふ」という(ことば)が、その「隔て」の糸に絡みつくように出現していることも見える。(1589)¹²

しかし、この現象を、雅に(ことば)を掛け合う男女の機智に富んだ応酬だというつもりはいささかもない。むしろ、「隔て」「違ふ」という(ことば)たちが、「薫大君」という磁場においてこそ発露しているという事実には、あるいは、「隔て」「違ふ」「同じ」という(ことば)たちが、会話・心中思惟・地の文…と、種々の位相で連鎖して、この「薫大君」物語を展開する鎖・糸になつているという機能に目を向けているのだ。

さて、この「薫大君」ペアを見た後で、「隔て」や「同じ」という(ことば)を鍵にして、他の人物たちを眺めてみると、たいへん際立った対照が浮かび上がってくるのであった。

三・C 匂宮と女一宮と——「隔て」の線

「総角」巻には、「薫大君」の物語の間に、匂宮が実の姉女一

宮に戯れかかるという、ある種近親相姦的な場面がほんの少しだけ置かれていて、例えばそれは「中の君への恋のやるせなさを女一宮に向けて」と解説されたり、この宇治十帖の構想の段階における女一宮物語の痕跡として解説されたり、というように、「薫大君」の物語とは切り離されて読まれてきたようなのだが、しかしこの「句宮・女一宮」ペアの挿話にも、「隔て」ということが「線」を成して流れていて、それによって、先の「薫大君」ペアと対照させて読むことが可能になる。「時雨いたくしてのどやかなる日」、句宮が女一宮のもとを訪れると、彼女は「しめやかに、御絵など御覧する」ところであった。

1 御几帳ばかりを隔てて御物語聞こえたまふ。

(総角 八六頁)

句宮は、「伊勢物語」を題材にした、男が妹に寄り掛かって琴を教えているという兄妹相姦的な絵を、女一宮に差し出しながら近づいてゆき、

2 「いにしへの人も、さるべきほどは、隔てなくこそならば
しはべりけれ。いとうとうとしくのみもてなさせたまふ

こそ」

(総角 八七頁)

と、あたかも薫が掻き口説いているが如くに戯れかかるのだが、転じて、実の姉弟という叶わぬ関係に、

3 ほのかに見たてまつりたまふが、飽かずめでたく、すこし

もの隔てたる人と思ひきこえましかば、(総角 八七頁)
という思いを抱くのであった。

4 紫の上の、取り分きてこの「所」をばならはしきこえたまひしかば、あまたの御なかに、隔てなく思ひかはしきこえたまへり。

(総角 八七頁)

と説明されるように、この「二所」は、共に育てられた実の姉弟「隔てなき」間柄なのであり、恋心は許されぬものであるのだから、逆に「もの隔てたる人」血の繋がらぬ他人であったらば懸想は許されると発想されている。

ここに於いて、この「句宮・女一宮」ペアと、先に見てきた「薫大君」ペアとが相對峙する。句宮と女一宮との間では、恋の実現には、むしろ「もの隔てたる」ことが希求されたのだが、薫の方は、大君という一女性に、「はらから」のように「隔てなき」関係を強要していることになるのだ。すなわち、「薫大君」の関係が、「隔て」という「ことば」を鍵にして、この「句宮・女一宮」の関係と向き合うことで、本来「はらから」の間にこそにある「隔てなき」結びつきを、一人の女である大君に求めていたという薫の倒錯が照らし出されるわけである。

三・D 大君と中君と——「同じ」の線

「薫大君」ペアが、「隔て」なる「ことば」で以て、「句宮・女一宮」ペアと、陰と陽の如く照らし合わされたように、宇治十帖に於けるもう一組の「はらから」大君・中君」ペアは、今度

は、「同じ」という(ことば)で以て、「薫・大君」ペアと対置することができる。

父八宮が山寺に籠もり、後に残された姉妹の連帯は次のように語られる。

1「所」大君と中君、いとど心細くもの思ひ続けられて、起き臥し語らひつつ、……泣きみ笑ひみ、たはぶれこともまめごと、同じ心になぐさめかはして過ぐしたまふ。

(橋姫 三三二頁)

実際、大君は、反目する女房たちの中で孤絶することになつても、

2「同じ心」に何ごともかたらひきこえたまふ中の宮(中君)は、

(総角 三三三頁)

と中君をとらえており、弁君を相手に思いの丈を述べる際にも、

3(大君)「……まことに昔を思ひきこえたまふ心ざしならば、(中君を)同じことに思ひなしたまへかし。身を分けたる心のうちは皆ゆづりて、(薫を)見たてまつらむこちなむすべき……」

(総角 三五五頁)

と語っている。

一方の中君も、大君死後、在りし日を偲び、大君を身を分けた「同じ心」の姉妹であると回想している。

4ゆきかふ時々にしたがひ、花鳥の色をも音をも、同じ心に起き臥し見つつ、はかなきことをも本末をとりて言ひか

はし、心細き世の憂さもつらさも、うちかたらひきこえしにこそ、なぐさむかたもありしか、

(早蕨 一二五頁)

5思ふ心をも、同じ心になつかしく言ひあはずべき人のなきままには、故姫君(大君)を思ひ出できこえたまはぬをりなし。

(宿木 二二六頁)

さて、このように、この姉妹はお互いに、ただ二人の「ゆかり」として「同じ心」であり「同じ心」であった、と認識されているのだが、ここで、「三・A 薫——同じ」の線で見たと、薫が大君に望んでいた「同じ」の(線)を思い起こそう。つまり、「同じ」なる(ことば)を鍵にして、「大君・中君」ペアを、「薫・大君」ペアと向かい合わせると、本来、実の「はらから」の間でこそ可能なら、「同じ」という状態を、血の繋がらぬ一女性大君に望んでしまっているという薫の錯誤がまたも照らし出されるわけなのだ。

三・E 浮舟——「隔て」の線——入水前

1遺戸といふもの鎖して、いささかあけたれば、(薫)「飛騨の工もうらめしき隔てかな。かかるものの外には、まだるならはず」と愁へたまひて、いかがしたまひけむ、(薫は、母屋の中に)入りたまひぬ。……ほどもなう明けぬるこちするに、鶏などは鳴かで、大路近き所に、おぼとれたる声して、いかにとか聞きも知らぬ名のりをして、うち群れて行くなどぞ聞こゆる。

(東屋 三三八頁)

2君(浮舟)ぞいとあさましきに、ものもおほえでうつ臥したまへるを、(薫)「石高きわたりは苦しきものを」とて、抱きたまへり。羅の細長を、車のなかに引き隔てたれば、

(東屋 三三九頁)

3(薫)「造らする所、やうやうよろしうしなしてけり。…明け暮れおぼつかなき隔ても、おのづからあるまじきを、この春のほどに、さりぬべくはわたしむ」

(浮舟 四六頁)

ここでは、前半の「きよら」「きよげ」のところまで述べたように、浮舟の入水々という事件を境にして、薫から浮舟へと、何が受け渡されているのかを見てゆかねばならないのだが、その前に、入水以前の浮舟に伴う「隔て」という(ことば)を辿ってみよう。

薫が初めて浮舟と対面する1では、物理的な「隔て」はいとも簡単に破られ、何の造作もなく二人は契りを交わすことになる。2も、車の中の「隔て」なのだが、これは前席の薫・浮舟と、後席の弁君・侍従とを「隔て」るもので、二人の間にはもはや物理的な「隔て」はない。3の薫の発言からも、浮舟を移す計画はやすやすと進められんとしているのがわかる。

こうして、「隔て」「違ふ」という(ことば)によって織り成されてきた大君との間の緊張関係は、浮舟との間では全く弛緩し、「隔て」など堂々と突っ切る薫と、了承も抵抗もしない浮舟とがいるのみである。

三・F 浮舟——「隔て」の線——蘇生後

1「なにかいと心憂く、かばかりいみじく思ひきこゆるに、御心を隔てては見えたまふ。いづくに誰と聞こえし人の、さる所にはいかにおはせしぞ」と、せめて問ふを、
〔集成(二条為氏筆本)は「立てて」。諸本により訂す。〕

(手習 一九二頁)

2(妹尼)「心憂く、ものをのみおほし隔てたるなむいとつきき。…」と言ふにつけても、(浮舟は)いとど涙ぐみて、
「隔てきこゆる心もはべらねど、あやしくて生き返りけるほどに、よろづのこと夢のやうにたどられて、…」

(手習 二〇二頁)

3(中将)「…憚るべきことにははべらねど、(浮舟は)なほ隔てあるこちしはべるべき」

(手習 二四二頁)

4(浮舟)われ世になくて年隔たりぬるを、思ひ出づる心もあらむかし、など、思ひ出づる時も多かり。

(手習 二四三頁)

5(妹尼)「…尺きせず隔てたまふこそ心憂けれ。…」とのたまへば、…(浮舟)「…隔ては何ごとにか残しはべらむ」

(手習 二四九頁)

6(妹尼)「なほのたまはせよ。心憂くおほし隔つること」と、いみじく恨みて、

(夢浮橋 二七〇頁)

7(妹尼)「この君(浮舟の弟小君)は、誰にかおはすらむ。なほいと心憂し。今さへかくあながちに隔てさせたまふ」と

責められて、……(浮舟)「げに隔てありとおぼしなすらむが苦しさに、ものも言はれでなむ。……」

(夢浮橋 二七三頁)

8 (小君)「おぼし隔てて、おぼおほしくもてなさせたまふには、何ごとをか聞こえはべらむ。うとくおぼしなりにければ、聞こゆべきこともはべらず。……」(夢浮橋 二七五頁)

ところが、入水未遂から救われて後「手習」夢浮橋「巻に於ける浮舟は、薫と大君とに伴う「隔て」をそのまま反復させられるかのように、妹尼から、中將から、実の弟小君から……と、浮舟を取り巻く様々な人物から、内面的に・外面的に……と、どんなに否定しても、あらゆる位相で「隔て」を咎められることになる。この浮舟の現況は、まさに、薫と大君との「隔て」の磁場を受け継ぐものといえよう。

つまり、潜在的薫々によって流された人形浮舟々が撫でつけられたものというのは、「薫大君」の間で発生していた「隔て」という(ことば)であったのだ。

四 ことばの線、これから

以上、前半では、「きよら」「きよげ」の(線)を追いかけることで、浮舟を連れ出す「きよげなる男」を潜在的薫々だと定直し、後半では、「隔て」の(線)を辿ることで、入水という事件が、その潜在的薫々から人形浮舟々へと、「隔て」という

〈ことば〉の磁場を受け渡される転換点になっていることを見てきた。

テクスト上の登場人物というものは、生身の人間のように性格とか人格とか血縁とかを有するものではなく、他の人物との相対性・関係性の中で発生する〈ことば〉を、ある情況・ある展開の(線)の上でのみ担わされた々駒々に過ぎない。故に、我々は、登場人物の心理などという内面に下降してゆくのではなく、その人物を取り巻く〈ことば〉の機能・効果という表面を横滑りしてゆくべきであろう。

〈ことばの線〉というものは、主題やら構造やら構想やら思想やらにはお構いなく駆け巡り走り抜けるものであるから、〈ことばの線〉を追いかけるといふ試みは、常に奔放な逸脱を伴う思考の拡散を要求されるものであろう。

しかしながら、実際のところ、宇治十帖という枠組みを設定し、人物ごとに区分けしての作業に終わつたことで、既成の主題論・人物論に奉仕することになつたのではないかと、深く危惧するところだ。

テクストという大きな蜘蛛の巣に、足を取られるのでもなく蜘蛛に喰われるのでもなく、〈ことば〉という糸の上を全力疾走で綱渡りすることを夢見て、今一度「源氏物語」に向かおう。

ともかくも、「薫・大君」間に発露する「隔て」の一例として挙げておく。

12 ちなみに、薫には、他に、八宮の遺言に「違ふ」という（線）、及び、道心に「違ふ」という（線）があつて、さらにここに接続することもできようか。

13 小学館日本古典文学全集「源氏物語」五・二九四頁頭註

付記 本稿は、一九九五年九月九日の関西平安文学会（於奈良大学）での発表をまとめたものである。

（かとうまさよし・本学大学院博士前期課程）